
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 44

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 861. 交差再帰定量化解析 (CRQA) に関する優れた論文
- 862. ザルツブルグ、フローニンゲン、ブダペストでの学会に向けて
- 863. オーストリア旅行計画とオランダ政府からの支援について
- 864. 状態空間グリッドの創始者マーク・レヴィスからの学び
- 865. 発達科学の転換期の最中で
- 866. アイデンティティの発達と創発について
- 867. 探索と関与を通じたキャリアディベロップメント
- 868. 束の間の休息に
- 869. つぼみと存在の流転
- 870. ピアノの即興演奏とシンクロナイゼーション
- 871. オランダ最優秀ティーソムリエの友人
- 872. 破壊的かつ感動的な夢について
- 873. 春の予感がする頃に
- 874. 夢が持つ垂直的な意味の解釈へ向けて
- 875. 季節の以降に伴って
- 876. 茶番な師弟関係
- 877. サイコセラピストとクライアントの相互作用に関する研究
- 878. 書くことと内側の体系との関係
- 879. 友人のピアノコンサートに参加して
- 880. 春の花々が教える自己の永続性と不滅性: 脱中心化と再中心化

早朝の突発的な雨が降り止んで以降、今日は一日を通して良い天気恵まれた。息抜きと気力の充電を兼ねたランニングをするために、昼食前に家を出た。帰宅後、研究論文の続きを執筆していた。その中で、今回の研究で用いる「交差再帰定量化解析(CRQA)」というのは、つくづく面白い手法だと思った。

ただし、私はこの手法の背景にある豊穡な数学理論についてほとんど知らない。しかし、発達科学の研究に非線形ダイナミクスを適用する理論的・実践的なコースを、将来的に世界のどこかの大学院で教える機会に恵まれれば、ぜひともそれを引き受けたいという思いがある。そのため、CRQAのように、自分の研究で活用した非線形ダイナミクスの手法から順番に、その背景にある数学理論についてじっくりと理解を深めていこうと思う。私の関心テーマの性質を考慮すると、非線形ダイナミクスに関する難解な数式を解けることは、ほとんど私には要求されていない。

必要なのは、その手法が発達現象のどのような側面を照らし出すものなのか、その手法を適用する際に辿る一つ一つのステップの数学的な意味は何なのか、そして可能であれば、活用される数式の意味を理解しておくことである。そうした第一歩が、明日から再度真剣に読もうと思っている、“Recurrence Plots for the Analysis of Complex Systems (2007)”という論文を読むことにあるだろう。これは、非線形ダイナミクスの手法に関して私のアドバイザーを務めてくれているラルフ・コックス教授から勧めてもらったものである。

この論文では、CRQAの母体となっている、「再帰定量化解析(Recurrence Quantification Analysis: RQA)」が、そもそもどのような数学理論から生み出され、どのような手順でその手法が構築されているのかを説明する専門的な論文である。RQAにせよCRQAにせよ、その手法をRやMATLABを通じて活用した際に、およそ八つほどの指標が出力されることになる。RやMATLABを用いる場合にも、それらの指標をそれぞれ計算する必要もなければ、それらの指標がどのように算出されたのかも知る必要はそれほどない。

しかし、この論文は、それらの指標がどのような変数を持つ数式から生み出されたのかということも含めて、各指標について細かく解説している。そのため、論文の随所に数式が登場するのだが、

それでもこの論文は、CRQAとRQAに関する本質を学ぶ上で、非常に優れた論文のように思える。明日からこの論文を本格的に読むことにしたのだが、本日、研究論文への引用も兼ねて、少しばかりこの論文に目を通していった。すると、この論文がそもそも、物理学の世界でも非常に権威のある“Physics Reports”というジャーナルに掲載されているものなのだとすることを、遅まきながら知った。

それゆえに、物理学に関して門外漢である私にとって、初読のときにこの論文を読むハードルが高かったのだと気づかされた。この論文は、80ページにわたる小冊子のような分量であるが、いつか発達科学と非線形ダイナミクスを架橋するような専門的なコースを、世界のどこかの大学院で担当するためにも、焦らずに腰を据えて本論文に取り組みたい。2017/3/21

862. ザルツブルグ、フローニンゲン、ブダペストでの学会に向けて

先ほど無事に、ウィーンでの宿泊先とザルツブルグでの宿泊先を確保することができた。基本的に、旅先の日中は外出しているため、また今回の旅も一人でのものであるため、いつもそれほどこだわったホテルを選択しているわけではない。あえて気にかけていることは、周りの環境や最寄駅の近さなどだろう。しかし、特に今回のウィーンの滞在では、ウィーンの街をゆっくり歩いてみたいという思いもあり、駅からそれほど遠くない場所に宿泊することにした。

ウィーンにせよ、ザルツブルグにせよ、確かに街の中心部のホテルは高価なものが多いが、街の中心部から外れると、意外と良心的な金額でホテルに宿泊することができる。今回宿泊先に選んだホテルは、どちらも金額的に非常に良心的だ。ウィーンの宿泊先のホテルから、街の中心部へ向かって歩くことは、今から非常に楽しみだ。また、ザルツブルグという街に関しても、その街並みの美しさを話しに聞いている。

両方の街に訪れたことのある友人に話を聞くと、ウィーンはきらびやかな美しさを持つ街であり、ザルツブルグは質素な美しさを持つ街とのことである。ちょうど、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生とも今回のオーストリアへの旅行に関する話になり、先生はザルツブルグにはスキーで訪れたことがあるが、ウィーンにはまだ訪れたことがないそうだ。ウィーンは、生涯の間に一度は訪れたい場所である、ということも先生は述べていた。ザルツブルグの宿泊先も、街並みを歩いて堪能するために、駅からあえて少し離れた場所に宿泊しようと思ったが、ザルツブルグへ滞在する目的はそもそも、非線形ダイナミクスの学会に参加するためだということを思い出した。

三日日間にわたり、朝から学会があるため、ザルツブルグの宿泊先は、学会の会場が近く、なおかつ最寄駅が近い場所にした。いずれにせよ、今回のオーストリア訪問は、昨年の欧州小旅行とはまた異なる楽しみがある。心が小踊る様子を隠すことはできない。

そういえば、今回の学会は四月の初旬に行われるものなのだが、ちょうどクネン先生とのミーティングで、五月にフローニンゲンで行われる、アイデンティティの発達に関する学会にも声をかけてもらった。確かに、今の私の研究テーマは、アイデンティティの発達とは関係のないものなのだが、アイデンティティの発達というトピックは、私の中でも依然として大きな位置を占めている。毎日執筆しているこの日記は、日々の生き様を書き留めるためにあり、自分の内側で知識の体系を構築することを意図している側面がある。

実はそれ以外の意図として、自分のアイデンティティが日々の探究や活動の積み重ねによって、どのように発達していくのかも、日記を通じて確認したいという思いがある。さらには、もともと私は、エリク・エリクソン、ローレンス・コールバーグ、ジェーン・ロヴィンジャー、ロバート・キーガン、スザンヌ・クック・グロイターなどの、アイデンティティを中心とした自我の発達を専門とする研究者たちから多大な影響を受けてきた。その影響は今も消え去ることなく、私の内側に留まり続けている。現在の関心テーマの探究の傍ら、彼らの書籍を読み返すこともしばしばある。そうしたことから、アイデンティティの発達というのは、常に私の中で重要なテーマであり続けている。そのため、クネン先生のお誘いを受け、学会のアシスタントとして参加することになった。これが五月の学会である。

午前中に、ランニングをするために自宅の扉を開けて、一歩走り始めた瞬間に、そういえば六月にも学会に参加しようと思っていたことを思い出した。これは以前から迷っていたのだが、ハンガリーのブダペストで行われる六日間に及ぶ非線形ダイナミクスに関する国際学会である。四月の初旬にザルツブルグで行われる非線形ダイナミクスの国際学会は、基本的に、社会科学の研究に非線形ダイナミクスを適用する研究者たちが参加する。そのため、こちらの学会は、参加者の関心事項や発表内容などを考慮してみると、私にとってハードルはそれほど高くない。

一方、ブダペストで行われる六月の学会は、もちろん社会科学の研究へ非線形ダイナミクスを適用することも考慮に入れられているのだと思うが、どちらかというと、物理学的かつ工学的な内容になっているという印象を受ける。そうした点を考慮に入れても、私がこの学会に参加したいと思ったのは、

ブダペストの街がどのようなものなのかをこの目で確認するためである。以前の日記で紹介したように、ブダペストの中央ヨーロッパ大学は、世界で最初にネットワーク科学の博士課程を設立したことで知られており、私はそのプログラムに非常に強い関心を持っている。

いつどのタイミングでその大学に行くのかわからないが、一度実際にブダペストという街が持つ雰囲気を感じ取っておきたいと思うようになった。そうしたことから、もしかすると、四月から三ヶ月連続で何かしらの学会に参加することになるかもしれない。そうした機会がなければ、自宅と大学の往復だけで完結する日々なので、論文や所属プログラムのスケジュールと合致すれば、せっかくなのでブダペストの学会にも参加したい。2017/3/21

【追記】

この日記で述べられているように、昨年四月にザルツブルグに足を運んだのは、学会に参加するためだった。それは自覚的な自己の目的であり、無意識的な自己の真の目的は別のところにあったのだということが今なら分かる。学会を終え、ザルツブルグの中央駅に向かっている最中に降ってきた啓示的なメッセージによって、私は作曲実践を始めることになった。それこそが、あの日私がザルツブルグにいたことの真の意味だったのだろう。フローニンゲン:2018/4/30(月)09:11

863. オーストリア旅行計画とオランダ政府からの支援について

昨夜は、四月の頭にザルツブルグで行われる学会へ向けた、オーストリア訪問に関する旅程を練っていた。ザルツブルグへ訪れる前に足を運ぶウィーンでの宿泊先を確保し、ザルツブルグでの宿泊先も確保したため、その他に事前予約が必要なものはない。航空券に関しては、数日前に購入済みなので、あとは出発の日を待つだけとなった。今回は、列車ではなく、飛行機でオーストリアに向かうことにした。

その際、アムステルダム以外にも、ロッテルダムやアイントホーフェンなどの主要都市からもウィーンに向けた飛行機の路線があることが分かった。ただし、よくよく考えてみると、フローニンゲンからロッテルダムやアイントホーフェンに行くのは、アムステルダムに行くよりも多くの時間がかかってしまう。そのため、いつものようにアムステルダムの国際空港からウィーンへ飛ぶことにした。

ザルツブルグでの学会が終わった後、もう一日ほど完全な自由時間を設けて、ザルツブルグに滞在するつもりである。特に、この街にあるモーツァルト博物館にはぜひとも足を運びたいと思う。当初の予定では、ザルツブルグでの終日観光を終えて、さらに次の日にザルツブルグの空港からアムステルダムに戻ろうと思っていた。この空港は、ザルツブルク出身の作曲家モーツァルトにちなんで、「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト空港」という名称が付けられている。

この機会に、ぜひモーツァルト空港を活用してみたかったのだが、あいにく、ザルツブルグからアムステルダムに戻る良心的な価格の便は、夜の遅い時間帯のものしかなかった。そのため、最終日は、ザルツブルグからウィーンに列車で移動し、ウィーン国際空港からアムステルダムに戻るのが賢明だと判断した。そのような計画を昨夜練っていた。旅程を組むというのは、完全に事務作業の一つであるが、未だ訪れぬ旅先について想像を膨らませ、あれこれと計画を練るのは悪くない。

歴史や観光場所などを含め、その街について事前に調べることを通じて、その街について親しくなっていく。その街に足を踏み入れる前から、すでにその場所を訪れたかのように、頭の中でその街の雰囲気や散歩コースを想像することは実に楽しい。出発に向けて、特にザルツブルグに関しては、もう少しあれこれ調べておきたいと思う。その後、他の事務作業として、昨日オランダ政府から送られてきた一通の封筒を開けてみた。

すると、それは保険料の還付に関するものであった。先日、知人から、オランダで収入がない人や留学生などは、オランダ政府に申請をすれば、居住に際する家賃手当や保険料の手当が出ると聞いていた。オランダに来てから、かれこれ八ヶ月が経とうというのに、私はそうした情報に大変疎かった。調べてみると、確かにそのような補助制度がこの国にあることが分かった。

私はオランダで収入を得ているわけではなく、滞在ステータスも留学生であるため、申請してみようと思ったところ、現在住んでいる家賃が基準の金額を上回っているため、家賃手当を貰うことはできなかった。ただし、保険手当に関しては、それがもらえることが分かった。保険手当の金額は、月々、日本円にして一万円ほどであるが、それでも支給されるだけ有り難いと思う。

先日、行きつけの美容師のロダニムとオランダ政府の社会手当の手厚さについて話をしていたのを思い出した。確かに、この国の個人の所得税や企業の法人税などの税率は、取り立てて魅力のあ

るものに思えないが、オランダ政府は得られた税金を社会手当等を含め、うまく活用しているような印象を私に与える。実際に、今回私は保険手当について恩恵を受けることになった。また、フローニンゲン大学に留学する際にも、オランダ政府から返済義務のない奨学金を支給してもらっている。

こうしたことを考えると、どれだけ私がオランダという国から支援を受けているのかとういことを身に沁みて実感する。もちろん、オランダから受けている支援というのは、そうした金銭的なものだけではない。この国が生み出す落ち着いた環境と雰囲気の中で、自分の探究活動に邁進することができているという恩恵も受けている。私は、オランダという国から有形無形の恩恵を受けていることを忘れてはならないだろう。いつになるのかわからないが、オランダという国に対して、私から恩返しをする必要があることを強く実感する。それに向かって、今日も明日も自分の仕事を進めていきたい。

2017/3/22

864. 状態空間グリッドの創始者マーク・レヴィスからの学び

今朝は五時半に起床し、目覚めと共に、一昨日から昨日にかけて張りのあつた肩の凝りがほぐれていることに気づいた。姿勢にはいつも気をつけていながらも、ここ数日間、文章を同じ姿勢で書き続けることが多く、そのために肩に凝りができてしまっていたようだ。

昨日の夜は、特に肩の凝りをほぐすような運動をしていたため、その効果が今朝になって現れたようだ。書斎には、確かに一般的な椅子も備え付けてあるが、一日の間中、私がその椅子に腰掛けることはほとんど無い。その代わりに、少しでも姿勢を良くし、身体全体に適度な変動性をもたらすために、バランスボールに座りながらずっと仕事をしている。仕事の合間合間に、単純にバランスボールの上に座るだけではなく、これを活用したエクササイズも適宜導入し、身体を常に緩ませた状態にしておきたいと思う。張り詰めるのは、仕事の最中において、思考と思考をつなぐ糸や既存の知識と新たな知識を結びつける糸だけで良い。

今日の早朝にまず取りかかったのは、現在の研究で用いている「状態空間グリッド(SSG)」の開発者でもあるトロント大学のマーク・レヴィスという発達科学者の論文である。これは、20年近くも前の1999年に書かれたものだが、今の私の関心に直結するいくつかの洞察をもたらしてくれた。特に、

先日、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生に指摘された箇所について、その答えになるような記述がこの論文の中にあった。具体的には、SSGを活用する際に、一つの状態がアトラクターであるとどのように認定するのか、という問題である。

この論文でも指摘されているように、観察過程において、何回ほどその状態を示せばアトラクターと見なせるのか、その状態に戻る時間の短さがどれほどであればアトラクターと見なせるのか、ということに関して明確な基準はない。そのため、レヴィスは、基本的な統計手法を用いながら、主に二つの手順でアトラクターを特定していくアプローチを紹介していた。一つ目は、非常に単純な方法だ。

状態空間において、アトラクターというのは、システムが同じ地点を何度も訪れる現象を指す。そのため、SSGの分析結果を参照した際に、まずはシステムが二回以上ある地点を訪れているものを特定する。そして、全体の観察事象の数を踏まえて、統計的に、その地点に複数回訪れた現象が確率的なものではないことを示せばよい。これまでの経験上、研究対象とするシステムが二回以上ある地点に訪れることはしばしばあるため、わずか二回ほどしかある地点を訪れていないのであれば、それは統計的に見て、確率的なものだと判断され、アトラクターと認定されることはないだろう。

今回の私の研究で検出された極端なアトラクターは、50回の観察事象のうち、29回ほどある地点を繰り返し訪れていた。このように、基本的な統計手法を活用して、アトラクターと思えるような現象が、確率的にそのように見えるだけなのではないかということを棄却して、それがアトラクターであることを立証していくというのが一つ目のアプローチだ。

二つ目のアプローチについても、統計学のt検定を用いる。一つ目のアプローチを通じて、アトラクターの候補を発見した後、今度はその強度を測定していくことが大切になる。その際の、一つの重要な指標は、「帰還時間」というものだ。これは、システムがある地点に戻ってくるまでの時間の長さを測定するものだ。

アトラクター状態というのは、求心性が強く、システムの挙動をその地点に引き寄せる力を持っている。そのため、アトラクター状態の強さが強ければ強いほど、システムはその地点に短期間のうちに戻ってことになる。帰還時間という指標は、まさにそれを測るものなのだ。この指標を用いてアト

ラクターの強度を測定するに際しても、その帰還時間が他の地点の平均帰還時間よりも短いことを統計的に立証していくことが必要になる。

これら二つのアプローチに関する説明は、ぜひとも私の論文の“Method”セクションに盛り込んでおきたい。また、実際にこれら二つのアプローチを採用することによって、アトラクターの特定とその強度の測定をより厳密に行いたいと思う。

マーク・レヴィスは、SSGの開発のみならず、エスター・セレンやポール・ヴァン・ギアートと同様に、ダイナミックシステム理論を発達現象に適用した研究で多大な功績を残している。今日の午前中は引き続き、レヴィスの他の論文を読むことになるだろう。2017/3/22

865. 発達科学の転換期の最中で

昨日、“Principles of Systems of Science (2015)”を読み進める中で、成長 (growth) と発達 (development) の違いに関する記述が目にとまった。そういえば、三年前に発達理論のセミナーを行った時、参加者の方から、日本語における「成長」と「発達」の違いについて質問を受けていたのを思い出した。二つの言葉は異なるものである以上、それらが内包する意味は必ず異なっているはずである。

しかし、当時の私は、その差異に関して、それほど明確な回答を持ち合わせていなかったように思える。ただし、今となっては、やはり「成長」と「発達」という言葉は、発達科学の文脈においてはかなり異なる意味を持っていると思う。

まず、「成長」というのは、端的に述べると、量的な増加現象のことを指し、そこには質的な変化が念頭に置かれることはない。例えば、GDPというのは、成長という言葉が用いられる一例である。「GDPが成長した」というフレーズをよく用いるが、「GDPが発達した」というフレーズは一般的ではないだろう。これは、GDPというものがそもそも量的な増大として捉えられていることを示唆している。GDPの値が仮に一兆円から二兆円になろうとも、GDPそのものが質的に変化したわけではなく、そこにあるのは、単なる数字上の変化である。こうした現象の数字的増加に対して、「成長」という言葉は適している。

一方で、何かしらの現象が単に数値的な増大ではなく、新たな特質や新たな構造を獲得するという質的な変化に対して、「発達」という言葉が用いられるにふさわしい。発達科学の専門書や論文を読んでいても、“development”という言葉は頻出するが、“growth”という言葉にお目にかかることはほとんどない。つまり、発達科学は、単に定量的に変化する現象を研究しているのではなく、定性的に変化する現象を扱っていることが分かる。しかし、実際のところ、「成長」と「発達」を、日常世界の言葉で切り分けることは難しいことがあるのも事実だ。

例えば成人に関して、「あの人は成長した」というのは、見かけ上の身長が伸びたことを指すわけでは決してないだろう。おそらくそこには、考え方の枠組みの変化や世界観の変容などが起こったことを持ってして、「あの人は成長した」と述べているのだろう。しかし、発達科学で用いられる言葉を正しく使用するのであれば、「あの人は発達した」と述べるほうが正確である。だが、このフレーズを耳にすることはほとんどないため、日常世界においては、成長と発達という言葉は曖昧に用いられているように思える。

いずれにせよ、昨日の文献調査の中で、そのようなことについて改めて考えさせられた。偶然にも、今日の午前中に読んでいたトロント大学のマーク・レヴィスの論文を読むと、発達科学の専門家の間においても、そうした言葉の問題は絶えずつきまとっていることを実感した。

実は20年以上も前から、ダイナミックシステム理論が一部の発達科学者の中で積極的に取り入れられる動きが始まっていた。北米においては、エスター・セレンやリンダ・スミス、カート・フィッシャー、マーク・レヴィス、アラン・フォーゲル、ヨーロッパにおいては、ポール・ヴァン・ギアート、ピーター・モレナー、ヴァン・ダー・マースなどは、そうした運動を引っ張っていった代表的な研究者である。彼らが書き残した専門書や論文を読んでもみると、各々がダイナミックシステム理論に持たせている意味が異なることに気づく。これは今となっては非常に興味深いのだが、ダイナミックシステム理論を適用した発達科学の研究に足を踏み入れた当初の私は、多分に混乱していたように思う。

もちろん、フィッシャーとヴァン・ギアートは共同研究者であるため、アプローチに関して二人を同じ括りにしてもいいのだが、それでも思想的に完全に合致しているわけではないことにも気づく。ましてや、他の研究者同士は、ダイナミックシステム理論を用いながらも、発達現象を異なる思想で眺め、現象に迫っていくアプローチもかなり異なる。そうした差異は、依然として現在においても残っ

ていると言える。だが、ある意味こうした差異というのは、ダイナミックシステム理論を発達現象に適用する当該領域を、さらに発展させていく可能性を持ったものだとも言えるだろう。

興味深いのは、ダイナミックシステム理論というのは、そもそも理論なのか、アプローチなのか、数学的技法のことなのか、という点について、研究者の間で今でも揺れている。つまり、ダイナミックシステム理論を、発達現象を説明する理論的な枠組みとして用いることを推進している研究者がいる一方で、ヴァン・ギアートらのように、数学的な技法を強調する研究者がいるのだ。また、ダイナミックシステム理論の中でもとりわけ重要な概念である「自己組織化」を例に取ってみても、それは瞬間的な変化を捉えるものなのか、それとも発達の大きな変動を捉えるものなのか、という違いがある。

まさに、大元にあるダイナミックシステム理論という一つの言葉に関して、研究者が持たせている意味が揺れているのだ。幸か不幸か、ダイナミックシステム理論の観点からすれば、こうした揺れは、システムが新たな状態へ到達するために不可欠なものである。言い換えると、トーマス・クーンが指摘したパラダイムシフトというのは、まさにこうした揺れを契機として生じるものなのだ。

ダイナミックシステム理論を活用する発達科学の領域において、このような揺れが生じているのは、パラダイムシフトの転換点を示しているように私には思える。実際に、ダイナミックシステム理論のみならず、非線形ダイナミクス理論と手法が発達科学に取り入れられつつある直近の傾向を考えると、自分を含め、動的な発達現象を捉える研究者たちは、大きな転換期を迎えているようだ。2017/3/22

866. アイデンティティの発達と創発について

昨日は、夕方から「複雑性とタレントディベロップメント」というコースの最後のクラスに参加した。前回のクラスに引き続き、今日もゲストスピーカーが講義を担当した。今日の講義を担当したのは、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授だった。クネン先生は本来、アイデンティティの発達を専門としている。

現在の私の研究テーマは、アイデンティティの発達ではないのだが、クネン先生がダイナミックシステムアプローチに造詣が深いため、私のアドバイザーを務めてもらっている。講義のテーマは、主に青年期から成人期初期にかけてのアイデンティティの発達とキャリアディベロップメントだった。

講義を通じて、幾つか考えさせられることがあり、それをノートに走り書きすることに私はしばしば熱中していた。私たちのアイデンティティを一つのダイナミックシステムとみなすと、それを構成する様々な要素を発見することができる。例えば、自分が自分をどのように見ているのかという自己イメージ、他者が自分をどのように見ているのかという自己イメージ、自分が他者をどのように見ているのかという他者イメージ、自尊心という感情など、挙げれば切りがないだろう。

重要なことは、それらの要素は確かに全て関係し合っているながらも、それらの度合いには差があるということだ。ネットワーク科学の発想を用いれば、それらのノードが連結するリンクの度合いは、決して等しいわけではなく、差異があると言い換えることができるだろう。また、要素を結び合わせるリンクに関しても、その関係性は、肯定的、否定的、中立的なものが少なくともあるだろう。また、それらの因果関係の矢印は、一方向的なものもあれば双方向的なものもある。

アイデンティティの発達にシステム科学とネットワーク科学の発想を用いるときには、それらのことに注意をしながらモデル化する必要がある。また、クネン先生の講義の中で、マライン・ヴァン・ダイク教授が補足説明をしていたときに何気なく使っていた「創発(emergence)」という現象についても、少しばかり考えを巡らせていた。

ちょうど、その日の午前中に読んでいた論文の中で、ピアジェ派や新ピアジェ派の多くは、発達現象を構成(construct)されるものと捉える傾向があるということが指摘されていた。まさに、ロバート・キーガンが提唱した「構成的発達心理学」というのは、その最たる例だろう。キーガンの重要な発達思想は、人間の発達は一生涯にわたって構成されていくという考え方である。しかしながら、近年のダイナミックシステム理論を活用している発達科学者たちは、少しばかり違った発想をする。

端的に述べると、彼らは、発達現象を構成されるものというよりも、創発されるものとして捉えるのだ。創発というのは、一つのシステムにおいて、下位階層にある構成要素同士の相互作用によって、要素の単純総和を超えた性質や機能が出現し、それが上位の階層になるという現象だ。驚いたことに、ジャン・ピアジェやピアジェ派に多大な影響を与えた発達論者のジェームズ・マーク・ボールドウィンは、実は「創発」に近い考え方を持っていることが、彼らの書籍を読むことによって分かった。だが、ピアジェ派や新ピアジェ派の多くは、そうしたシステム科学の発想をほとんど持っていないため、彼らが発達現象を創発的なものだとして捉えることはほとんど無いと言える。

元来、創発という現象はシステム科学のものであるが、今の私はそこからさらに、ネットワーク科学の観点から創発を捉え直してみると、新たにどのようなことが言えるのかに関心がある。2017/3/23

867. 探索と関与を通じたキャリアディベロップメント

昨日の「複雑性とタレントディベロップメント」のクラスで行われたグループ課題について少しばかり振り返っていた。この課題は、まずは各人が自分のキャリアディベロップメントの変遷を振り返ることからスタートした。具体的には、12歳から現在までの年齢を横軸に取り、「探索(exploration)」と「関与(commitment)」という二つの概念を縦軸に取り、年齢ごとにそれらの概念の強度がどのように変化したのかを示すグラフを描くことからスタートした。

グラフを描いている最中に、そういえば当時の自分がどのような環境に置かれ、どのようなことを考えながら生きていたのかについて回想していた。完成したグラフを見ると、探索にせよ関与にせよ、変動性に富んだ形となった。

このグループ課題の前に、サスキア・クネン教授からキャリアディベロップメントについて説明があったのだが、探索と関与の度合いの組み合わせに応じて、キャリアディベロップメントの種類を幾つかに分類することができる。例えば、探索の度合いが強く、関与の度合いが低い場合は、キャリアディベロップメントがモラトリアムの時期にあることが分かるだろう。逆に、探索の度合いが低く、関与の度合いが高いというのは、良かれ悪しかれその仕事の中に自分のキャリア形成のエネルギーが注がれていることなどが分かるだろう。

私は同じ座標平面上に二つのグラフを描き、両者を比較してみると、これまでは探索と関与が重なり合うことはほとんどなかったことに気づいた。つまり、キャリア形成に関して探索の時期にあれば、関与の度合いが低く、一方、特定の仕事に関与している時期には、探索の度合いが低いという傾向が見えたのだ。しかし、直近の数年間のグラフを見ると、探索と関与が重なり合い、二つの度合いがともに向上していることに気づいた。すなわち、今の私は、自分の仕事に深く関与しながらも、同時に幅広い可能性を探索している姿がグラフから見て取れたのである。

今の自分の状況を客観的に眺めてみると、これは的を得ていると思った。なぜなら、今の私は人間発達に関する研究者と実務家としての仕事に関与しながらも、自分の関心領域や専門領域を絶え

ず拡張しようとする探索運動を常に行っているからである。同時に、今回の課題の範囲を超えて、それでは次の十年に関して、自分はどのような歩みを踏み出そうとしているのかを考えていた。すると、次の十年においても引き続き、探索と関与が重なり合いながら上昇していく姿が浮かび上がった。

大きな偶然だが、昨夜衝動的に、これからの十年間において、どの国でどの大学を拠点に活動するのかをノートに書き出していたため、そのページを見返してみると、探索と関与が高一度合いで維持されていく様子が見て取れた。しかし、探索運動が生涯にわたって継続していくことを知りながらも、おそらくその後からは、関与の度合いが探索を上回るのではないかと思っている。

フローニンゲン大学での一年目も、いよいよ来学期が最後のものとなる。最後の学期には、まさに上記の論点と関係した「組織におけるキャリアディベロップメント」と言う産業組織心理学のコースを一つ履修する予定だ。このコースを通じて、アイデンティティの発達に関する理論をもう一度学び直し、このコースは、自分のこれからを考える上でも非常に有益なものとなるだろう。少なくとも後十年間は、探索と関与の高波の中で生きていくことになりそうだ。2017/3/23

【追記】

この日記を読み返していると、ちょうど日記で登場したサスキア・クネン先生に先日メールをした時のことが思い出された。今年の秋から米国の大学院で客員研究員を務める話が立ち消え、フローニンゲンにもう一年残ることを先生に報告した。そのメールの中で言及していたのが、まさにこの日記で書かれている「探索」と「関与」についてであった。今私は数多くの種を蒔くという探索と、それらの種を育てていくという関与を深い次元で行っていくことに従事しているようだ。欧州で三年目の生活を迎えることになったのも、まさに探索と関与をこれまで以上に深く進めていくためなのだと思う。

過去の日記は、大切なことを数多く私に教えてくれる。過去の気づきが新たな気づきを呼び込んでくる。気づきが気づきを生む連続的な流れの中を私は生きている。こうした気づきは、さらなる探索と関与を進めていくために不可欠のものとなっている。フローニンゲン:2018/4/30(月)09:41

先ほど無事に、「創造性と組織のイノベーション」のコースで課されている、グループ共同論文の最初のドラフトをメンバーと一緒に担当教授に提出した。この課題に取り組むにあたって、産業組織心理学を専攻しているルクセンブルク人のヤンとドイツ人のマーヴィンに随分と助けられたように思う。

ヤンの論文アドバイザーを務めているのが、ちょうどこのコースを担当しているエリク・リーツシェル教授ということもあり、このコースに対するヤンのモチベーションは非常に高かったように思う。また、マーヴィンも、産業組織心理学の修士号を取得した後、すぐに企業社会で職を得るのではなく、今度は経営学の修士号を取得することになっており、関心領域と合致している今回のコースに対する彼のモチベーションも高かったように思える。

私も今回のコースの内容を非常に面白いと感じているが、私の関心は経営学的な観点から人や組織の発達を探究するのではなく、やはり発達心理学の観点から人や組織の発達を探究することに関心があるため、彼らに比べれば、自分のモチベーションはそれほど高くなかったように思う。モチベーションというのは、どのような知識領域においても技術領域においても、自分の知識や技術の発達を促す極めて重要な潤滑油であることを改めて痛感する。そして、モチベーションという感情が芽生えてくる領域は各人異なり、どのような領域に対してモチベーションを持つのかというのは、個性の表れでもあり、才能の表れでもあると思う。

ヤンとマーヴィンの働きによって、私は他の二つの論文の執筆に集中することができた。一つは修士論文であり、もう一つは「複雑性とタレントディベロップメント」のコースで課せられている二人一組の共同論文だ。どちらも共に、三月中に完成の目処が立つだろう。

クラスから帰宅後、少し自宅でくつろぎたいという気持ちになった。専門書や学術論文を読むのではなく、心を落ち着かせるような文章を読みたいと思った。ここ数週間は特に、毎日自分の専門に係る論文や書籍に目を通しては文章を執筆するということが続いており、和書に一切触れることがなかったことに気づいた。久しぶりに、自分の内側に染み渡るような日本語を読みたいと思う。

日本語と言っても、現在の自宅の書斎の本棚には、森有正先生、井筒俊彦先生、辻邦生先生の全集ぐらいしかない。逆に言えば、異国の地で生活する上で、心を落ち着かせ、なおかつ励ましを私にもたしらしてくれるのは、彼ら三名が残した和書で十分だと言える。

書斎の本棚を眺めた結果、手に取ったのは、辻先生の日記だった。今日は就寝を迎えるまでの時間、辻先生の日記を読み耽ることを自分に許容してもいいのではないかと思う。書斎の音楽をより静かなものに変え、今からこの日記をゆっくりと読み進めたいと思う。2017/3/23

869. つばみと存在の流転

とても静かなピアノ曲が書斎の中を流れていく。旋律に耳を傾けては、書斎の窓の外に広がる景色を眺めるということを意識的に行っていた。

気づかない間に、書斎の窓の外に見える木々につばみのようなものが生まれていることを発見した。あの厳しい冬の時期、私は毎日、窓の外から見える枝だけの木々を眺めてきた。冷たい雪が木々に覆いかぶさっていることも目撃してきたし、激しい風に折れそうになっていることも目撃してきた。それでも、それらの木々は、今このようにして存在し続けている。

しかも、新たな実と花をもたらすつばみがそこに宿っていることは、私の心を幾分躍らせた。彼らと共に、過酷な冬と一緒に過ごすことができて本当に良かったと思う。私はどんな時でも、それらの木々を毎日見てきた。同時に、彼らはどんな時でも、私を見ていたのだと思う。

春が近づき、つばみが宿る木々を見ながら、彼らとは一心同体であり、彼らから大きな励ましをいつも私は受けてきたことに改めて気づかされる。今私が感じているこの不思議な感情こそが、自己と他者が共存関係にあって初めて生み出される類のものなのかもしれない。新たな季節の到来に向けて、再度私は、どのような環境や状況に置かれても、その場その時に、絶えず自己の存在の灯火を静かに力強く燃やし続けたいと思った。

書斎に流れるピアノ曲と窓の外から見える木々のおかげで、随分と心が休まったような気がした。改めて、私にとって最も心が休まるのは、静かな環境と音楽の中で、落ち着いて好きな書物や論文に目を通すことだと思った。また、それと並行して、自分が書き留めておきたいことを文章にすることも、

私の心を最も落ち着かせてくれる行為である。今のところ、それら以外に心が休まる行為というのはなかなか見当たらない。

毎日の生活は、観想的かつ默想的な意識の中で、絶えず読み、絶えず書くという行為を通じて、規則正しく刻まれていく。逆に言えば、基本的に私の毎日の生活は、絶えず読み、絶えず書くということの中で形作られるものであるがゆえに、常に最も心が休まった状態にあると言えるかもしれない。

ここ五年間ほどを振り返ってみると、日本や米国に滞在していた時において、心が休まらない状態というのは、読むことと書くことから離れることを余儀なくされている時であった。欧州での生活を始めて以降、読むことと書くことの中に没入できていることには、本当に感謝しなければならない。そのおかげで、ようやく自分の取り組むべき仕事が始まったと思っている。読むことと書くことを通じて、自己を超越し、それらの行為が他者への関与につながるまで、この生活を静かに継続させていく必要がある。

窓から見える木々と同様に、一つのサイクルを小さな変化とともに一生継続させていくような生き方をしたいと強く思う。果実や花に気づくのは、それが現実世界に存在している時だけでなくもいいと思うのだ。果実が落ち、花が散った後にも、裸の木々を見ながら、私たちは果実と花をそこに見ることができる。いや、そこにそれらを見なければならない。それこそが、私たちの存在が不滅であり、永遠に流転することの真理だと思う。2017/3/23

870. ピアノの即興演奏とシンクロナイゼーション

モネの絵画が醸し出す色彩感覚を彷彿させるような夕暮れの空が、食卓の窓から目に飛び込んできた。あるいは、ドビュッシーのピアノ曲の旋律が映り込んだかのような夕暮れの空が、食卓の窓の外に広がっていた。その夕暮れの空に溶け込むことができたらどれほど心地よいだろうか、と思った。そう思った瞬間に、私はすでにその空に溶け込んでいることに気づいた。これが人間の認識の持つ力だろう。

毎日毎日、その日一日というのは、自分にとって結局何だったのかを内省させられる。毎日は何ものでもなく何かであるのは間違いないのだが、結局、そのような雲をつかまされたような感覚で毎日を終える。だが一方で、私は確かに、自分の存在を取り巻く意味の総体のようなものに絶えず腰掛

けているような不思議な安堵感に包まれるのだ。もしくは、何ものかに絶えず見守られ、ゆりかごのようなものの中で日々の活動に従事しているような感覚がするのである。そのようなことを、夕暮れ時のフローニンゲンの空を見て思った。

昨日は、「複雑性とタレントディベロップメント」のクラスが終わった後、ひょんなことから、グループワークをいつも一緒に行っているオランダ人のピーターの自宅で夕食を食べることになった。ピーターは、私にとって一番仲の良いオランダ人の友人だ。

ピーターの自宅で夕食を食べることになった経緯は、そもそも、その日のグループワークの最中に、最終課題に向けた実験に協力してもらった被験者が突如実験に参加できなくなり、インドネシア人のタタに依頼をしたことから始まる。ピーターと一緒に最終課題に取り組んでいるのは、ドイツ人のフランであり、二人の共同研究テーマは、ピアノ経験のある二人とピアノ経験のない二人が即興演奏を行った時、お互いにどのようなプロセスでピアノを奏でるのかを調査するものである。

ちょうどタタは、五歳からピアノを習っており、銀行に就職してからも、休日はジャカルタの街の子供たちにピアノを教えていたそう。そうした経験を買われ、ピーターとフランの実験で欠けた被験者を補うために、タタに白羽の矢が立ったのだ。

クラス終了後、タタと最終課題について話し合っていたところ、ピーターからタタと一緒にうちに来て、実験が終わったら夕食を共にしないか、という誘いを受けた。その日の夜は特に何も予定がなく、ピーターやフラン、そしてタタとは非常に仲が良かったため、彼らと一緒にピーターの自宅に行くことにした。ピーターの自宅に着くと、彼のルームメイトと実験の被験者がその場にいた。彼らに挨拶を済ませたところで、早速実験を開始することになった。

私はもちろんこの実験に関係がないため、単に観察をしていただけなのだが、実に面白い実験だと思った。ピーターの自宅にはピアノはなく、実験で用いたのはMacに備え付けられているGaragebandというソフトウェアの中にあるピアノだ。最初にタタと、フローニンゲン大学の音楽学科の修士課程に在籍するピーターの友人が即興演奏を同時に行った。二人はピアノの経験者であり、確かに最初はお互いに様子を見ながら即興演奏をしていたのであるが、ある時から、二人の奏でるリズムがシンクロナイゼーションするという現象が起こり始めたのである。

これは見ている側にとっても大変興味深いものであり、その演奏に聞き入りながら、私は幾分感動していた。二人がパソコン越しに向き合い、ヴァーチャルピアノを演奏する様子は少しばかり馴染みのないものだが、二人が奏でる調和のとれた演奏は、とても興味深い現象だった。

二人の演奏が終わり、別の二人組みの演奏が終わったところで、ピアノ経験のないピーターと私も試しに即興演奏をしてみた。すると、先ほどの経験者の二人のように、うまくシンクロナイズーションが起こらない。実は、この実験に関して、シンクロナイズーションを起こすことを被験者に求めているわけでは決してなく、そのような指示を実験前にしていない。だが、私とピーターは意図的にシンクロナイズーションを起こそうと試しに演奏をしてみたが、それでもなかなかうまくいかなかった。

その後、タタに話を聞くと、ピアノ経験者は演奏理論というものが頭の中にあり、ある音が奏でられたら次に奏でられるはずのない音が何なのかを分かっているとのことであった。ピーターと私にはそのような理論がないために、二人の演奏は一向に調和のとれたものになることはなく、混沌としたものだったと考えることができるかもしれない。

もちろん、ピーターと私の演奏においても、シンクロナイズーションのような現象は見られたが、それは一時的であり、永続的なものではなかった。この経験を通じて、私は、音楽理論だけではなく、あらゆる領域において理論として結晶化されたものの存在が、光の束に思えて仕方なかった。こうした光の束があるのかないのかによって、この世界に調和が生み出されるのか否かが決定されてしまうかのようなことまで思ったのだ。

何気なく立ち寄ったピーターの自宅でこのような経験をすることになるとは思ってもみなかった。この件については、まだ書き留めておきたいことがあるため、折を見て気づきを記しておきたい。2017/3/23

871. オランダ最優秀ティースムリエの友人

私が最も仲の良いオランダ人は、私と別のプログラムに所属しているピーターだ。ピーターは、オランダ語で提供されている発達心理学の修士課程に在籍している。ピーターは、英語で提供される人間発達に関するコースも積極的に履修しており、今年の九月の最初の学期の時に彼と知り合っ

た。ピーターと言葉を交わし合ったのは、図書館のプリンターで論文の印刷を待っている時であった。

ピーターは日本にも二度ほど訪れたことがあり、アムステルダムで日本語を習っていたこともある。また、「複雑性と人間発達」のコースを通じて、私と同じように、ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスの手法にのめり込んでいる同士でもある。日本を愛し、複雑性科学と発達科学を愛するという共通点から、ピーターと私は非常に仲が良くなった。昨夜、ピーターの家に訪れた時、彼が思わぬ趣味を持っていることに感動した。

一ヶ月ほど前に、ドイツのアマゾンを通じて、複雑性科学に関する専門書を注文した際に、誤って二冊同じものが届けられた。二冊同じ専門書を持っていても仕方ないので、私と同じ関心を持って発達研究に取り組んでいるピーターに、この書籍をあげようと思った。携帯で連絡をすると、ピーターから「是非その書籍が欲しい」という返信が来た。同時に、「お礼に何を渡せばいいか？」という文言が付されていた。

私は、特にお礼など求めていなかったため、「特にお礼はいらない」と返信しようと思っていた。すると、立て続けにピーターから、「美味しいお茶があるから、それをお礼に渡す」というメッセージが届いた。私の勝手な思い込みで、ピーターが冗談交じりに、その辺りのスーパーで購入したありふれたお茶を渡すと言っているのだらうと解釈し、お茶もいらないと伝えた。そのようなやり取りを一ヶ月前にピーターとしていた。

すると、昨日彼の自宅を訪れた際に、思わぬことに出くわしたのだ。ピーターの自宅には、お茶を淹れるための本格的な道具がいくつも棚に飾られており、棚に収納しきれないお茶の数々が、本棚にも置かれていたのだ。そして、おそらく日本の和書の英訳であるお茶に関する専門書が、ピーターの本棚にしまわれていることを発見したのだ。私はその時まで、彼がお茶を真剣に学び、お茶の道を歩んでいることを知らなかった。

さらに驚いたことに、先週あたりにアムステルダムで行われたお茶のソムリエ大会で、オランダとベルギーから集ったソムリエの中で、ピーターは準優勝を獲得したそうだ。また、優勝はベルギー人だったそうであり、実質上、ピーターはオランダ人の中で今年の最優秀ソムリエだったそうだ。

私はお茶に造詣は深くないが、ピーターが日本からもお茶を取り寄せており、そのパッケージが日本語であることから、二人の間でお茶に関して大いに盛り上がった。実際に、ピーターに何種類かのお茶を飲ませてもらい、どれも美味であった。特に、ピーターが大切に保管している玉露を飲ませてもらった時、自分は日本にいるような感覚に包まれた。

私:「ピーターが本気でお茶を探究しているとは知らなかったよ・・・」

ピーター:「前にメールをしたらどう？(笑)」

私:「あれはからかいのメールとして受け取ってたよ(笑)」

ピーター:「特に四年前から真剣にお茶を学んでたんだよ。よかったら、何か一つ持って帰るかい？
この前もらった専門書のお礼だよ」

私:「ぜひ！どうもありがとう」

私は結局、ピーターから、鹿児島県産の煎茶を有り難くもらうことにした。今度日本に帰国する際に、ピーターを喜ばせるようなお茶を買って帰りたいと思う。2017/3/23

872. 破壊的かつ感動的な夢について

先ほど浴槽に浸かっている最中、どうやら私が見る夢の中には、大きく分けると二つの極端な感情の塊が存在していることに気づいた。一つは、途轍もない暴力性から生み出される、全てのものを打ち壊すような力強い感情である。もう一方は、全てのものを溶かし去ってしまうかのような感動的な感情だ。

昨夜の夢の中では、感極まって涙を流している自分がそこにいた。私が夢から強引に覚醒させられるのは、たいていの場合、破壊的な感情を発露させる瞬間か、感動的な感情を発露させる瞬間かのどちらかである。どちらも定期的に自分の中に起こることなのだが、今朝は、全身に振動が伝わるような感動の中で目を覚ました。その感動をもたらしたのは、至ってシンプルな理由であった。

どうやら夢の中で私は、「ある人がそこにいる」ということに対して、言葉にならないほどの感謝の念を持ち、それに対して涙を流していたようなのだ。そこでの感動は、大木と一体となったような太い感動だったと言っていいだろう。樹液のような濃い涙が滲み出さずにはいられないほどの感動だった。いついかなる時も、私を支え続けてくれているのは、破壊と感動なのかもしれない。そんなことを思わずにはいられなかった。

夕食後、そこからさらに破壊と感動との関係について考えていた。夢の中での出来事を振り返ると、往々にして、破壊的な感情を発露させた後にやってくるのは、単なる開放感ではないことに気づいた。そこにはいつも、ある種の感動が付きまとうのだ。一見すると、これはとても奇妙なことのように思える。

夢の中で、私が暴力的なエネルギーを解き放つ時、それは対象そのものを打ち壊すだけではなく、常にそこには再創造や新たな調和がもたらされる。つまり、破壊をすることが目的なわけではなく、何かを破壊して終わりではないのだ。むしろ、破壊からの創造や調和を目的としているかのような様子が伺えるのだ。やはり、破壊と創造・調和というのは密接なつながりがあり、創造や調和には感動を引き起こすような何かが潜んでいる気がしてならない。そのようなことを思った。

今朝目を覚ました瞬間に、思わず大きな伸びをして一日を始めたくるような、活力に満ち溢れた夢を昨夜見ていた。夢というのはいつも思うが、大変興味深い現象である。未だ、夢という現象が持つ豊穡な意味の一片も掴めていない。夢とはまるで、無意識の世界における意味の玉手箱のようである。夢が開示する意味、夢の種類や規則性など、今後も夢について小さな関心を持ち続けることになるだろう。自分が見る夢について何も分からないというのは、結局、自分について何も分かっていないことを示しているに他ならないのだ。2017/3/24

【追記】

破壊からの創造と調和、そして創造と調和が生み出す感動という感情について改めて思いを馳せている。今の自分が日々取り組んでいること、探究していることは全てそこに向かっていくものなのかもしれない。最終的には感動なのだ。日々を深く生きることの感動、日々この世界と深く繋がっていることのシンプルで豊かな感動。それを表現し、それを形としてこの世界に共有するために私は毎日を生きているようなのだ。フローニンゲン:2018/4/30(月)10:06

フローニンゲンの街も非常に春らしくなってきた。近所の公園や街路に植えられた植物たちが、春の訪れを告げている。今週から来週にかけて、気温も上昇する一方である。ようやく長く暗い冬を抜け、光に満ちた春に入る。まさに明後日からサマータイムに入るため、日本と仕事をする際の時差に注意をしなければならない。

今日は午前中に、「再帰定量化解析(RQA)」と「交差再帰定量化解析(CRQA)」に関する論文を読んでいた。これは以前に簡単に言及した、“Recurrence Plots for the Analysis of Complex Systems (2007)”という論文である。この論文は、物理学のジャーナルの中でも権威のあるPhysics Reportsに投稿されたものであるだけに、物理学や高度な数学的知識のない私のような者にとっては、読み進めるのが非常に困難である。この論文は、非線形ダイナミクスの手法に関して私のアドバイザーを務めてくれているラルフ・コックス教授から勧めてもらったものである。

私がこの論文を読もうと思った目的は明確であり、RQAとCRQAの背後にある数学理論を学ぶためであり、それらの分析手法が持つ応用可能性などについてより理解を深めるためであった。そうした目的を持ってこの論文を読み進めていたため、難解な数式表現などには深い入りすることなく、とりあえず一読することができた。この論文に掲載されている知識項目の豊かさを考えると、今後も折を見てこの論文を読み返す必要があるだろう。論文を読んだ後、少しばかり意識が朦朧としていた。

聞こえてくるシューベルトのピアノ曲に身を委ねる形で、静かに目を閉じ、少しばかり瞑想をしていた。瞑想後、意識が幾分明瞭なものになったため、再び仕事に取りかかったが、しばらくすると、今度は眠気に襲われた。そのため、少しばかり仮眠を取ることにした。寝室のベッドに横入り、しばらくすると、突然、額の真ん中あたりに白く強烈な光を感じた。

午前中に仮眠を取るときは、黄色がかったエネルギーの流れが全身を駆け巡ることがよくあるのだが、今回はそうした現象とは異なり、稀な体験だった。仮眠後、完全に眠気が払拭されたため、システム科学とネットワーク科学の専門書をそれぞれ一章ほど読み進めた。明日、明後日にかけて、「複

雑性とタレントディベロップメント」のコースで課せられている論文を集中的に執筆しようと思っているため、今日は自分の関心に純粹に従った読書の日にならうと思っていた。

システム科学とネットワーク科学の探究がひと段落すると、いつもはあまり気につけない一つの本棚を眺めていた。そこでふと、久しぶりに、ウィルバーの“The Eye of Spirit (2001)”を読んでみようと思いついた。その本におもむろに手を伸ばし、書斎の上に置いた。夕方からは、久しぶりにこの書籍とゆっくり向き合いたいと思う。今日というこの日、その瞬間に、この書籍を手にとったのは何か意味があるに違いないと思わずにはいられなかった。2017/3/24

874. 夢が持つ垂直的な意味の解釈へ向けて

今日は夕方から、ケン・ウィルバーの“The Eye of Spirit (2001)”を久しぶりに読んだ。今朝方に、本棚からこの書籍を手にとったのは、決して偶然ではなかったのだということに、本書のある記述に行き着いた時に気付いた。

昨夜途中まで書き留めていた夢に関する日記を今朝書き足し、その後にふと、この書籍の背表紙に引きつけられるものがあり、本書を手にとった。ウィルバーの書籍は、本文のみに注目が当てられがちだが、本人が語っているように、ウィルバーが主張したいことや興味深い観点などは、本文以上に脚注の中に盛り込まれている。そのため、夕方から脚注を中心に読み進めていた。

すると、ウィルバーが夢の解釈について説明をしている箇所にとどろき着いた。昨夜から今朝の日記にかけて、夢について少しばかり考えを巡らせていたがゆえに、この箇所を食い入るように読んでいた。夢の中で現れるいかなるシンボルも、単に無数の意味を水平的に持ち合わせているだけではなく、一つのシンボルには意識の階層構造に応じた垂直的な無数の意味がある、という記述に対して、閃くものがあった。

この記述の意味内容自体は、発達理論を学んできた者にとっては、何ら目新しいものではないだろう。だが、その意味内容を自分の体験を通して理解することと、知識的にそれを理解することはやはり次元が異なる。一つのシンボルに、垂直的な構造特性があり、複数の意味が重層的に存在しているということを、私は少し見落としていたように思う。シンボルが持つ水平的な複数の意味を探究するだけではなく、上下に運動する形で、シンボルの重層的な意味を解釈していく必要があると改

めて思った。階層構造の下から上へ辿るように、今後の夢の中で現れるシンボルが持つ意味を自分なりに解きほぐしていきたいと思う。ウィルバーの書籍に目を通した後、少しばかり過去の日記を読み返していた。

気づかないうちに、オランダに来てから随分と日記を書き留めてきたのだということに気づかされる。オランダでの二年目、三年目が、自分にとってどのような意味を帯びてくるのか、今は想像もつかない。どのような意味を帯びるのかは分からなくても、一つ確実に言えることは、二年目も三年目も、自ら意味を見出し、自ら意味を構築し続けていくということだ。そのために、私は今後も日記を書き続けるだろう。

そのようなことを思いながら、視線を書斎の窓の方向へ向けた。すると久しぶりに、赤いホログラムのように輝く夕日を見た。その夕日が、オランダを象徴する平坦な土地の遥か彼方まで伸びている様子が見えた。久しぶりにこの輝きを持つ夕日を見た時、本当に新たな季節が始まると思った。それは間違いなく、私の内側の新たな季節の到来を予感させるものだった。2017/3/24

875. 季節の以降に伴って

早朝より、文句のつけようのない快晴が広がっている。日の出も早くなり、私が起床する時間には、すでに空が明るくなっているような状況になった。冬の時期の日の出は、朝の九時ぐらいであったから、今の状況が幾分信じられないぐらいである。これまでの季節から新しい季節への移行に伴い、私の精神と身体が、その移行に向けて準備をし始めているようだ。

昨日の朝に引き続き、今朝も十分な睡眠を取ったにもかかわらず、精神と身体に倦怠感のようなものがあつた。そのため、無理をして仕事に取り掛かるのではなく、再び寝室に戻り、数十分ほど仮眠を取ることにした。心身がこのような状態にある時は、無理に仕事をしてしまった成果は得られないため、少しばかり休息を取るに限る。毎日決まった時間に就寝し、十分な睡眠時間が取れていることは間違い無いのだが、フローニンゲンでの生活を始めて以降、丸一日休憩を取ったことなどほとんどなかったように思う。

世間で言えば、今日も土曜日に該当するが、いつもと変わらずに自分の仕事を進めようと思う。ただし、季節の以降に伴い、心身も移行期にあるため、今日は無理をせず、ゆったりとした心持ちで

仕事に取り組むようにしたい。具体的に本日どのようなことに取り組むかという、午前中に発達支援コーチングのセッションが一つ入っている。クライアントと年度末まで一緒に課題に取り組むことになっており、当初のお互いの約束に従えば、本日が最後のセッションになるだろう。

午前中のセッションが終わってからは、午後を含め、「複雑性とタレントディベロップメント」のコースで課せられている協働論文を執筆したい。一緒にこの課題に取り組んでいるインドネシア人のタタと先日話し合い、四つの章立てのうち、三つを自分が引き受けることにした。と言うのも、今回の論文のテーマである「プロセスリサーチ」に関しては、私の方が知識と経験があるため、タタと話し合ったところ、そのような分担になった。発達の始点と終点を比較するような既存のアプローチではなく、発達の過程をつぶさに追いかけるプロセスリサーチは、現在執筆中の修士論文でも採用しているものである。

そのため、どのような参考文献を活用し、どのようなデータを集め、どのような手法でそのデータを分析するかなどについて、かなりの知識と経験を獲得することができたと思う。こうした知識と経験を獲得することができたのは、実際に自分の手を動かし、試行錯誤しながら実際の研究を進めていったことが大きいだろう。また、研究を進めていくための知識に関しては、これまでフローニンゲン大学で履修してきた幾つかのコースが非常に役に立っている。それらのコースで獲得した知識を頭の中にとどめておくのではなく、研究を通じて、真に自分の血肉になるようにしてきたことが大きいだろう。

それに付随して、正規のプログラム外で、私は自分の学びを絶えず深めるような実践をしていたことが何にもまして大きいように思う。興味深いもので、大学が提供する体系だったプログラムよりも、自分で関心のあるテーマを自分なりの方法で探究していくことの方が、内発的な動機を最も促すのである。

学術機関に所属していなければ得られない学びが確かにある一方で、それだけでは真の学びを得られないことも事実である。何からも強制されることなく、内発的な動機に基づいて、これからの探究をより一層深いものにしていきたい。2017/3/25

先日、自分の研究データを眺めていた際に、面白いことに気づいた。今回の研究データを解析してみると、クラスの回を追うごとに、学習者は学習項目に関する理解度を向上させ、その一方で、教師側の関与の度合いが減少していたことが分かった。より厳密には、今回の研究で活用した、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論の尺度において、教師がクラスの中で説明する複雑性のレベルは、クラスの回を追うごとに減少傾向にあり、逆に、学習者側はそのレベルを増加させる傾向にあったのだ。

これはもちろん、今回の研究で取り上げたコースの趣旨と構成が少し特殊だったからかもしれない。このコースでは、教師と学習者とのインタラクションに重きを置き、教師はある意味、ファシリテーターの役割に徹することが求められていた。

それにしても、クラスの回数が増えていくことに応じて、教師の発言の複雑性が減少傾向にあったことは興味深い。これはまさに、学習者側の理解度の向上に応じて、教師側が徐々にその支援の度合いを緩めて行ったという現象が背後にありそうだ。つまり、教師は、学習者にとっての足場となるスキヤフォールディングの度合いを徐々に下げていったのだ。言い換えると、学習者が徐々に高い理解度を獲得していったことに応じて、教師側が関与の度合いを緩めていったと考えられる。

結果的に、学習者は教師と同様のレベルにまで到達し、教師からの支援をほとんど受けなくても、高度なレベルを発揮することができるようになったのである。この様子を見てみると、教師とは、学習者の発達を支援する役割を担う一方で、支援関係は永続的なものではなく、一時的なものなのだろうと思った。言い換えると、教師という存在は、ある領域において自分が発揮する能力レベルに学習者が到達するまでは、支援する者とされる者という関係を学習者と結ぶが、ひとたび学習者が自分と同じ能力レベルまで到達すると、そうした関係は自然と消えていくのだと思ったのだ。

もちろん、学習者が教師を敬う気持ちは永続的なものだとしても、学習者が教師から発達的な効果を真に享受することができる期間というのは一時的なものだろう。自分自身に置き換えて考えてみると、これまで多くの師を持ち、今も多くの師を持っているが、永遠に一人の師から学び続けるというのは、随分とおかしなことだと改めて思わされた。

長きにわたって一人の人間から学びを享受することがあったとしても、それは決して永続的なものではない。やはり、優れた師というのは、弟子に乗り越えられていくのが巧みな者のことを指すのだと思われた。師を一向に乗り越えられない弟子は、そもそもその領域において見込みがないと言えるかもしれない。一方、弟子を成長に導けない師は、もしかすると、そもそもその道において偽者なのかもしれない。

これは、人を成長に導く能力や個性の問題ではなく、成長を促すエネルギーというものが、そもそも高い場所から低い場所に向かって流れるという性質を考えてのことである。仮に、その道における師の能力が高度に発達しているのならば、その道を歩もうとする弟子は、師から成長を促すエネルギーを自ずと享受するように思うのだ。そうしたことが起こらないのであれば、弟子が一切の見込みを持っていないためか、弟子がすでに師匠と同じレベルにあるからなのではないだろうか。

自分に置き換えて考えると、今現在、複数の領域を同時並行的に探究し、これからも多様な領域を探究していくことになると思うのだが、どのような領域を探究するにせよ、見せかけだけの茶番な師弟関係は避けたいものだと思うされる。2017/3/25

877. サイコセラピストとクライアントの相互作用に関する研究

今日は午前中に、発達支援コーチングのセッションを終えた後から就寝直前まで、「複雑性とタレントディベロップメント」のコースで要求されている論文を執筆していた。これは、インドネシア人のタタと協働で執筆しているものだ。私は来週からオーストリアへ学会へ行くことになっており、ちょうどこの論文の提出期限と重なっている。また、タタも別のコースの最終試験を翌週に控えているため、この協働論文を提出期限よりも幾日か早く仕上げることをお互いに合意した。午前中に、まずは論文のイントロダクションを書き上げた。

今回の研究は、サイコセラピストとクライアントがセッションの中でどのような相互作用を行っているのかを調査するものである。具体的には、クライアントの発話の複雑性とセラピストの発話タイプに着目し、クライアントの発話の複雑性がセラピストとのやり取りを通じて、どのように変化していくのかを調査する。

カート・フィッシャーの共同研究者でもあったマイケル・マスコロとマイケル・バサチーズが記した名著“Psychotherapy as a Developmental Process (2010)”に指摘があるように、クライアントが精神的浄化(カタルシス)を経験するときに、発話の複雑性が増加する現象が見られる。これは個人的に大変興味深い現象であり、以前の記事で紹介したように、この現象は心理システムの内側におけるエントロピーの増加現象と密接な関係を成している。

私たちの研究の仮説では、クライアントの複雑性は変動性を見せながらも、セッションの進行に応じて増加傾向を示し、精神的浄化に伴う高度な複雑性の地点に移行する瞬間を示し得る、というものである。この仮説の裏には、さらに二つの重要な概念が存在している。一つは「双方向的作用」であり、もう一つは「創発」である。双方向的作用というのは、簡潔に述べると、セラピストが一方向的にクライアントに影響を与えているのではなく、セラピストとクライアントの双方がお互いに影響を与え合って発達していくという考え方を示す概念である。

つまり、セラピストの発話はクライアントの発話の複雑性に影響を与え、クライアントの発話の複雑性が増えることによって、セラピストは発話の種類と複雑性を変えていくのだ。ここには、一方向的な因果関係はなく、双方向的な因果関係が時間の経過に応じて、どんどん変化していくというプロセスが見て取れるだろう。

そして、創発は、ダイナミックシステム理論の最重要概念の一つであり、下位の階層にある要素が相互作用することによって、突如として、上位の階層構造を生み出すというものである。今回の研究の文脈で言えば、セラピストとクライアントの相互作用というミクロなやり取りが積み重ねられた結果として、ある時突然、一つ次元の高い階層構造にクライアントが辿り着く現象のことを創発と呼ぶ。

タタに第二章の研究手法に関する文章を任せており、私は主に、第一章のイントロダクション、第三章のデータ解析、第四章のさらなる研究提案の箇所を執筆することになっている。今日は午後から夜にかけての時間を費やすことによって、無事に第三章まで執筆することができた。

イントロダクションを執筆する最中、春の気候を彷彿させるかのような陽気な気分になり、データ解析に関しても、のめり込むように夢中になって執筆を行っていた。まずは、データ解析から仮説を検証する作業を行っていた。非常に面白いことに、仮説通りに、クライアントはセラピストとのやり取りを

通じて、変動が伴いながらも、セッションの経過に応じて、発話の複雑性を増加させる傾向を示していた。また、一つのセッションの最中で、クライアントの心的システムが「相転移」を経験しているようだった。

相転移とは、先ほどの創発と密接な関係があり、それはシステムが既存の階層から別の階層に移行することを示す。また、上記で指摘したように、相転移が生じる前は、エントロピーが増大し、相転移が生じた後は、エントロピーが減少するという傾向が、確かに今回の研究の中でも見られたことは、とても興味深い結果であった。

そこからさらに分析を深掘りし、「交差再帰定量化解析 (cross recurrence quantification analysis: CRQA)」という非線形ダイナミクスの手法を用いて、セラピストの発話タイプとクライアントの発話の複雑性のシンクロナイゼーションの度合いを確かめた。

書きそびれていたが、今回の研究は、一つのセッションを取り上げたのではなく、二つの連続するセッションを取り上げた。そのため、最後の分析では、二つのセッションを比較してみて、どちらの方が、セラピストとクライアントがシンクロナイゼーションを起こしているのかを調査した。

今回のデータがカテゴリーデータであるという性質上、CRQAの手法を活用することによって得られる指標の中でも、四つのものに絞って分析を進めた。詳細を割愛するが、結果として、初回のセッションよりも、二回目のセッションの方が、セラピストの発話タイプとクライアントの発話の複雑性がシンクロナイゼーションを起こしていた。

今回の研究論文で課せられている制限字数が短いため、ここで分析を止め、さらなる分析の可能性を第四章に盛り込んでおこうと思う。今日も文章を書くことによって彩られた休日だった。2017/3/25

878. 書くことと内側の体系との関係

昨日は、終日にわたって論文を執筆していた。それは私の修士論文ではなく、「複雑性とタレントディベロップメント」のコースで課せられている協働論文である。文書を書き続けるという一日を昨日過ごしたわけだが、今朝は特に疲労もなく、逆に清々しい目覚めであった。書くということに関して、精

神的な筋力のようなものが構築されつつあるのを日々実感する。何らかのコースで課せられる小さな論文であったとしても、それが修士論文のような論文であったとしても、査読付き論文であったとしても、それらと真剣に向き合えば、書く能力というのは徐々に獲得されていくのだと思う。

それは、他の能力の発達過程と全く同じである。欧州に来てからは、英語で学術論文を執筆する機会が増えただけではなく、日本語で日記を記す機会も増えた。渡欧の前に自分自身にいい聞かせていたように、海外で生活をする際に、日本語を用いて日々の思念を書き留めておくことは、私の精神を安定させ、異国の地での生活をより充実したものにしてくれるというのは確かであった。

日々ことあるごとに、自分の中で湧き上がることを日本語で表出化させておくことは、精神衛生上、私の助けになっている。母国語にせよ英語にせよ、これからも文章を執筆し続けることによって、それらの言語を培う筋力を根底から鍛え上げたいと思う。今はまだ道半ばでしかない。いや、それよりもむしろ、道の始点によりやく立ち始めたと言った方が正確かもしれない。

文章を執筆すればするほどに、自分の内側で何かが育まれていくのを確かに感じる。それは知識や経験の体系と呼んでいいものだろう。自分の内側で知識や経験の体系が育まれれば育まれるほどに、文章の中身や外形が変化をしていく。そして、そうした変化が巡り巡って、自分の知識や経験の体系をさらに変容させていく関係が見て取れる。文書を書くことと内面の成熟は、相互的な因果関係を結んでいるのだ。

それは決して一方向的なものではなく、双方向的なものである。ここにも、二つのシステムが動的な相互作用を生み出していることが見て取れる。私たちの内面世界は、本当にダイナミックなシステム関係の織物だとつくづく思う。

今日は午前中に、昨日取り掛かっていた協働論文の続きを執筆したいと思う。実際には、続きを執筆する前に、今回の研究で用いる二つのコーディングシステムの測定者間信頼性を算出しなければならない。そのため昨夜、この研究と一緒に取り組んでいるインドネシア人のタタに、測定者間信頼性を算出するための仕事を一つ依頼していた。具体的には、80個ほどのサイコセラピストの発話の中から、ランダムに20個選び、作成したコーディングマニュアルに基づいて、それらの20個のデータの発話タイプを再評価するというものである。

私は、クライアントの発話の複雑性について同様のことを行うことになっている。タタからの回答が送られて来れば、私の方と合わせて、二つのコーディングシステムの測定者間信頼性をRを用いて算出したいと思う。その作業と並行して、昨日執筆していた文章に若干の修正を加えたい。今朝起床した直後に、論文の中で、「交差再帰定量化解析」を用いた分析について述べる前に、シンクロナイズーションという現象について少しばかり説明が必要だと思った。

そのため、その箇所に加筆をしたいと思う。それらがすべて終われば、論文の最後の箇所である、今回の発見事項に基づいたさらなる研究提案について文章を執筆したいと思う。昨日ほどではないが、今日も静かに文章を執筆していく日になりそうだ。2017/3/26

879. 友人のピアノコンサートに参加して

今日は、午前中の仕事を計画通りに終え、午後からは上の階に住むピアニストの友人のコンサートに足を運んだ。実はこれまで、ピアノのコンサートに行ったことはなく、今回が初めてであった。

昼食をいつも通りの時間に済ませ、普段よりも早い時間帯にいつもと同じ時間だけ仮眠を取ってから自宅を出発した。この間、その方がアムステルダムでコンクールに出場した際にも会場に足を運ぼうと思ったが、その時はスケジュールが合わなかった。

今回のコンサートは、アムステルダムではなく、フローニンゲンからバスで30分ほどのところにあるローデンという街で行われた。あまり誇れる話ではないが、私はフローニンゲンで生活を始めてから、欧州の小旅行に出かけた際、デン・ハーグに日帰り旅行に出かけた際を除いて、フローニンゲンの街から出たことがほとんどない。それどころか、この八ヶ月間の生活範囲は、自宅から半径数キロ以内であり、その円から外に足を踏み出したことは一切ない。そのため今回は、オランダに来てから始めてバスに乗った。

目的地に向けたバスに乗るために、15分ほどバス停まで歩いた際にも、随分と新しい発見があった。というのも、そのバス停に行くまでのルートをこれまで歩いたことがなく、視界に入る景色が非常に目新しく、色々な小さな発見があり、とても新鮮な気持ちになった。私は、日常を精密時計のように送ることを好む傾向にあるが、そうした時計の針をあえてずらしてくれるような変化を生活の中に入れ込むことも好きだ。その優れた手段は、新たな道を歩くことや新たな場所を訪れることだろう。

これまで通ったことのない道を歩きながら、静かに滲み出す好奇心を持って辺りを眺めていた。バス停に到着し、しばらくするとバスが来た。オランダのバスのシステムが先払いなのか後払いなのかも分からなかったが、私よりも先に待っていた一人の女性が先にバスの中に入り、そこでチケットを購入していたので、先払い制度だと知った。ほどなくチケットを購入し、席に着いた。

心地よくバスに揺られながら、辺りの景色を眺めていると、フローニンゲンの街の外には、とてものどかな環境が広がっていることに気づいた。こうした場所で生活することは、静かに自分の日常を形作っていくことができるに違いないと思った。バスの車窓から見える景色に見とれていると、いつの間にか目的地のローデンに到着した。

バスから一步降りた瞬間に、小鳥のさえずりが聞こえてきた。私は小鳥のさえずりが聞こえて来る方向に向けて歩き出した。降り立ったバス停からコンサート会場までは、非常に閑静な住宅街が広がっていた。

今回のコンサートは、一般的なコンサートホールで行われるようなものではなく、個人の家を貸し切って、そこで演奏が行われる仕組みになっている。閑静な住宅地の奥まった場所にその会場があった。会場が見えるまで、本当にこのような場所でピアノのコンサートが行われるのか若干不安であった。だが、会場が見えた瞬間に、演奏を聴きに来たとされる何人かの人たちが会場に入っていくのが目に入り、確かにここでコンサートが行われるのだと分かった。

会場に到着すると、今回場所を提供してくれる家のオーナーが出迎えてくれた。オーナーの方は、そのピアニストの方が通っている音楽院にレクチャーをしに来たことがあるらしく、二人は知り合いのようだった。オーナーの方と少し雑談をした後に、演奏が行われる場所に移動した。そのオーナーの方は、オルガンを専門としていながらも、昔はピアノも演奏していたそうであり、彼の書斎のような場所で演奏会が行われることが分かった。

会場には、20人を超す人たちが詰めかけ、参加者は私を除いて全員が仕事をリタイアしたような年齢の方たちであった。コンサートホールでかしまって演奏を聴く際には、そこでしか味わえないものがあるのだと思うが、このような場所で音楽を聴くのもいいものだと思う。おそらく、ヨーロッパの音楽愛好家の人たちにとって、このように自宅を貸し切って演奏会を開いたりすることは珍しいことで

はないのだろう。オーナーの書斎に置かれている音楽関係のおびたしい蔵書と関連資料の背表紙を席に腰掛けながら眺めていると、友人のピアニストが会場入りをし、演奏会がいよいよ始まった。

今回は合計で40分ほどの演奏会であり、ショパンとドビュッシーの曲を演奏してもらった。その友人はプロのピアニストであるし、私には音楽の知識がそれほどあるわけではないため、演奏された曲の細部について何かを語る資格はないだろう。ただ演奏に聴き入っている間中ずっと、私は観想的な意識状態にあったと言える。演奏されている曲を決して耳から聴いていたわけでもなく、全身を通じて聴いていたわけでもない。

身体を離れる形で音と関係を持つことは可能なのだということを改めて知った。それは、こちら側から音に歩み寄るわけでも、音の方からこちら側に歩み寄るわけでもない。私の存在と音が共鳴し、両者が不可分の関係を持つような感覚にずっと包まれていた。ショパンの曲にせよ、ドビュッシーの曲にせよ、私が普段から聴いているものに関しては、時折音に意識が向かう時があつたが、基本的に私の存在と音が溶け合っているような感覚に絶えず包まれていったと言っても過言ではない。

ウィーンに訪問する一週間前に、観想的な意識に誘われるような演奏を聴けてよかったと思う。帰宅後から、そして明日から、また自分の仕事をいつものように取り組んでいきたいと思う。2017/3/26

880. 春の花々が教える自己の永続性と不滅性:脱中心化と再中心化

今日からいよいよ、欧州はサマータイムに入った。早朝目覚めると、いつもと同じ時間に起きたという感覚がありながら、時間が一時間ずれていたのはそのためだ。総じて先週は気温がとても暖かったが、今日はまだ寒さが感じられた。ちょうど昨日、行きつけのチーズ屋を訪れた帰りに、ノーダープラントソン公園の前を通った。

何気なく、公園の方に目をやると、池の周りの芝生の上に綺麗な花が咲いていることに気づいた。この公園は、社会科学キャンパスに向かう時にいつも通るのだが、この間通った時には花が咲いていなかったことを考えると、この数日間で一気に花が開花したのだと思った。

日中、春を感じさせる暖かな太陽の光りが公園を包んでいた。その光がそれらの花に差し込み、美しさが引き立っているように見えた。私はその場で立ち止まらざるをえなかった。静かに立ち止まり、咲いている花々を眺めていると、一気に意識がそれらの花に吸い込まれていった。

それはどのような種類の瞑想よりも強力な作用であった。一瞬のうちに、しかも完全に自己が溶解することが起こったのだ。自然というのはつくづく偉大であり、とても不思議な力を持っていることに気づかされる。花々が引き起こした、自己が完全に溶解する感覚は、永遠に触れる感覚だと言っていいかもしれない。

自分という存在が消え去るこの感覚は、自分という存在が最初から存在していなかったと思わせるような類いのものであり、そのさらに奥深くにあるのは、自分の存在というのは永遠のものなのだという感覚だ。つまり、自己が最初から存在などしていなかったという表面的な感覚を超えた先にある、自己は永遠に不滅なのだという感覚に近い。

アメリカの大学院に留学した際に、私は生まれて初めてこのような経験をするようになった。今でもその時の体験を覚えている。その時は、自分が存在しているということを疑い、自分が自分だと思っていた存在が、実は単に自我や社会によって構成されたものだということに気づき、少々面食らったのを覚えている。そこからさらに、自己という存在は、そもそも存在していなかったのだという強烈な体験に見舞われることが多くなっていった。

しかし今になって思えば、それらは存在の永続性と不滅性を私に理解させるために不可欠な体験だったのだと思う。近所の公園に静かに、そして力強く咲く紫色の綺麗な花たちを見て、改めて自己の存在について考えさせられた。この問題は、実はその先により深いテーマをはらんでいることを知っているが、そこに踏み入っていくのは、今の私には時期尚早である。自分の内面がより成熟し、その時が来たら、また再びその問題に取り組むことになるだろう。

チーズ屋の帰りに何気なく通りかかった公園での出来事は、私のこれまでの中心を新たなものにしてくれるかのような作用があった。ピアジェの言葉で言えば、それは「脱中心化」という現象であり、過去の中心から脱却し、同時に新たな中心を獲得する方向に向けて新たな歩みを踏み出したことを考えると、ウィルバーの言葉で言う「再中心化」が起きていたように思える。

人間として生きる日々の生活は不思議なことで満ち溢れている、とつくづく思わせてくれるような土曜日の午後だった。2017/3/26

【追記】

この日記で書かれている具体的な内容についてあえて言及するというよりも、この日記の最後で触れられている「脱中心化」と「再中心化」という概念について少しばかり考えていた。これらの概念の存在を長らく忘れていた自分がいることに気づく。一旦中心から離れ、新たな中心を創造していくということ。中心から離れる際にも、究極的な自己の一点だけは中心点として残り続けている。離れていくのはそうした中心点の周りにある諸々の付着物だ。「対象から離れることが対象の最奥に辿り着く道である」という考え方は、まさにこれらの概念と関係しているだろう。自己の究極的な中心点を残しながら、あるいはそれに近づいていくために、擬似的かつ虚構の中心点から脱却していく。それによってまた擬似的かつ虚構の中心点が再創造されるのだが、そのプロセスを絶え間なく推し進めていくと、自己の究極的な中心点が開かれてくる。そんなことを思う。フローニンゲン:2018/4/30
(月)10:44